

式 辞

先ほど卒業証書を授与された 173 名の卒業生及び保護者の皆さま、御卒業まことにおめでとうございます。

光のどけきこの春の日に、卒業生、保護者、御来賓の方々と一堂に会しまして、戸田翔陽高等学校第 59 回卒業式を挙行できますことは、私共、職員一同、大きな喜びとするところであります。

さて卒業しながら、皆さんは「仰げば尊し」という歌をご存知でしょうか。この歌は、昭和には卒業式の定番でしたが、平成に入ると次第に歌われなくなり、令和の今ではほとんど歌われていません。

しかし、私はこのまま忘れられてしまうには惜しい、素晴らしい歌だと思いますので、これをご紹介します、式辞に代えさせていただきます。

「仰げば尊し」が、歌われなくなった理由の一つは、歌詞が古く難しいという事です。明治時代に作られた歌なのでやむを得ないかもしれませぬ。

もう一つは、歌詞の内容が現代の価値観に合わない、と批判された事です。

批判された点はいくつかありますが、まず最初の「仰げば尊し、わが師の恩」という部分です。「先生の恩はありがたい」という意味ですが、ここについては、「教員が生徒を指導するのは仕事だから当たり前。生徒に感謝を強制するな。」と批判されました。

たしかに先生に恩を感じるかどうかは、生徒の皆さんの自由です。教員の側から「感謝しなさい」とは言えません。

しかし、私たち戸田翔陽高校の教員は、何かの縁があって皆さんと出会いました。皆さんの先生方は、そのことを大事に思っているはず

です。もし皆さんにも同じような気持ちがあれば、この卒業式の後、先生方にその気持ちを伝えてあげてほしいと思います。

そして最も批判が多かったのは、二番の後半、「身を立て 名をあげ やよ励めよ」という部分でしょう。

ここは「自立して、周囲から認められるように頑張ろう」と言っています。今風の言い方でいえば「自己実現をしよう」ということです。しかし、この部分にも「出世競争をあおるからよくない。もったのんびり生きるべきだ」という批判がありました。

しかし、どんな職業に就くにせよ、真面目に取り組んで、知識や技術を磨き、いい仕事をすることは大切です。その結果、みんなから認められ、信頼されるようになることは、人にとって大きな喜びだと思います。

つまり、「身を立て」も「名を上げ」も自分自身の生き方の問題です。人と張り合ったり、人を蹴落としたり、というのではありません。自分に誇りをもって生きていくための心構えです。

私はこの部分はとても素晴らしいと思います。

「仰げば尊し」の歌詞は一番から三番までありますが、どれも「今こそ 別れめ いざさらば」で終わります。現代語にすれば「さあ今、別れよう。さようなら」という感じでしょうか。歌詞前半の学校生活を懐かしむ内容から一転して、力強く前向きに新しい道に進む決意が示されます。この潔よさがとても心地よく感じられます。

卒業生の皆さん。皆さんは今日、高校を卒業するという大きなミッションをやり遂げました。これは皆さんの努力の成果です。大いに誇ってください。またこれは、保護者の方々をはじめ、皆さんを応援してくれた人たちの成果でもあります。感謝の気持ちを忘れないでください。

皆さんはこれまで、戸田翔陽高校という一つの学び舎で共にすごしてきました。しかし、これからは、企業等へ就職する人、大学や専門学校へ進学する人、あるいは今しばらく次へ進む準備をする人など、様々な道に分かれます。明日からは、人生の次のステージに向けて、力強く一步を踏み出してください。

その皆さんにあらためて、卒業のはなむけとして申し上げます。

「身を立て 名をあげ やよ励めよ 今こそ 別れめ いざさらば」

令和八年三月十二日

埼玉県立戸田翔陽高等学校長 鈴木 健